図録 244~247 ページに収録のコラム「共同体の展示室か、共和国の展示室か――芸術家の『戦い』の場としての私的領域と公的領域」につきまして、執筆者である東京大学大学院松井裕美准教授より以下のメッセージが届きました。読者のみなさまにとっても有意義な情報であると判断したため、お知らせいたします。

カタログ 245 ページ記載のジュール・ダルー《友愛》の記述にあたり私が参照した研究について、この度お問い合わせいただきましたので、お伝えします。「ライシテ」の文脈における本作品の意味について解釈するにあたり、第三共和政下のサロン史を概観する著書 Fae Brauer, *Rivals and Conspirators: The Paris Salons and the Modern Art Centre*, Cambridge Scholars Publishing, 2013（特に p. 80 における本作品の解説）が大変参考になりました。また、私のコラムでの記述は作品の一般的な図像解説にとどまるものですが、安藤智子「ジュール・ダルーにおける『共和国』の表象」（シンポジウム「越境と往還」における口頭発表、2024 年 9 月 21 日）は、ダルーの複数作品を横断する共和主義的表象について新規の知見を交え論じる点で、示唆に富む発展的研究です。この度は展覧会図録のコラムという性質上、註釈の記載を簡潔にいたしましたが、これらの研究については、本テーマに関する皆様の理解をより一層深めるような専門的研究ですので、この場をお借りし、改めてご紹介する次第です。Brauer 氏の文献については入手がやや難しいものですが、安藤氏のご研究については、現在私が編者の一人として刊行を計画している論文集に収録される予定です。読者の皆様におかれましては、そちらも是非、ご参照ください。

東京大学大学院総合文化研究科准教授　松井裕美

展覧会の開催が、みなさまにお楽しみいただける展示のご提供の場となりますとともに、さまざまな研究の共有・発信によって、今後の研究の発展へと寄与するものとなりますことを願っております。引き続きのご支援を、何卒宜しくお願い申し上げます。

2025 年 12 月 24 日

宇都宮美術館、三重県立美術館、下野新聞社